

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

現代中国都市部における回族女性に関する人類学的研究—浙江省義烏市の事例を中心として—

(An Anthropological Study of Hui Women in Urban China: A Case Study of Hui Women in Yiwu City Zhejiang Province)

氏 名

李 之易

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論では、漢化・世俗化とイスラーム運動が同時に進んでいる現代中国都市部という歴史的、地域的背景の中で、回族女性がイスラームをどのように理解し、語っており、実践しているのか。彼女らはいかに「ムスリム」として、「女性」として生きているのかについて記述し、分析することを目的にする。そして、回族女性を考察する時、敬虔と不敬虔、服従と抵抗の二項対立を超えるために、制度上の宗教と世俗、教義上のイスラームと非イスラームなどの概念の固定化を前提にしないアプローチから、エージェンシー（能動性）という概念を導入し検討した。それには2つの意義がある。

漢化・世俗化とイスラーム運動が同時に進んでいる二極化の状況の中で生きるムスリムとして、中国における回族は、制度上や教義上で分断されたその両方の領域にかかわらざるをえない。従来の研究の中で、個々の人を敬虔と漢化のどちらか一方に還元し、主体を固定化する傾向を乗り越え、実践の中で宗教と世俗、イスラームと非イスラームの間の関係の柔軟性と流動性を分析することは、研究意義の1つである。

そして、女性を研究対象にするのは、制度上の宗教と世俗、教義上のイスラームと非イスラームという両方の領域を架橋する必要性は、女性の視点から先鋭なたちであられるからである。なぜなら、回族女性はまた二重の周縁化に直面している。その1つは前述したように、世俗的な現代中国社会で生きる宗教信徒として、主流社会によって周縁化されてきたことである。もう1つは、男性中心

と言われている宗教を信じる女性として、宗教言説や宗教制度によって構築されたジェンダー構造の中で周縁化されてきたことである。そしてムスリム女性に関する従来の研究の中では、そのような男性中心のジェンダー構造の中の女性の行動を抵抗と服従の対立的な図式で理解することが多い。しかしそのような図式は構造と主体の対立をもたらす。二分法を乗り越えるために宗教に服従するか、抵抗するか、という見方から、構造の中にあり、構造を通じて世界へ働きかけるエージェンシーへと視座を移す必要がある。ジェンダー構造から見れば、ムスリムとして、女性として、非ムスリムの主流社会に生きることは、世俗的な男女平等とイスラームのジェンダーイデオロギーの両方と付きあって、具体的な状況の中で、両方の領域の言説や実践を使い分けたり、両立させたり、あるいは転換させたりしながら、相応しい振る舞いをしなければならないことを意味している。そのような分断された領域を架橋する回族女性たちのエージェンシーの可能性を分析することは、第2点である。

第2章ではまず、本研究の調査対象である「回族」とは誰のことを指すのか、そして主旨に沿って、漢化・世俗とイスラーム運動の動向に注意しながら、回族の歴史と現状を明らかにする。回族は中国における最大のムスリム民族であり、集団の自意識が言語や形質ではなく信仰する宗教に基づいている特異な民族枠ともいわれている。主流社会との関わり方について見るならば、いつの時代にも、回族は宗教的少数派として、以下の問題に直面している。すなわち積極的に主流社会と関わることは、社会的地位や経済的利益などを獲得するには都合がいいが、漢化の傾向を避けることができない。一方、主流社会との関わりを避けて、イスラームを一心に追求する場合、周縁化されるリスクがつきまとう。さらに、近代に入ると、マイノリティに対して、国民国家による政治的な統合のプロセスは一層加速した。中華人民共和国建国以後の宗教政策の結果、国内における回族コミュニティの漢化・世俗化圧力が一層強くなってきた。中国において回族が、イスラームの教えに従いながら現代社会で生活を送るためには、宗教政策や主流社会との関係を不断に微調整し続ける必要がある。そのプロセスの中で回族女性はどのような状況にあるのか、女性の宗教教育（女学）と言う側面から述べた。非ムスリムの主流社会における宗教的少数派であり、同時に、男性中心と見られる宗教を信仰する女性である、男性と比べると彼女らの実践と摸索はさらに重層的になり、多様化することが明らかになっ

た。

第3章では、フィールドに入って、義烏市における回族女性たちに注目した。本章では義烏市市内のモスクと2つの勉強の事例から、集団的な宗教実践を行う空間における回族女性たちが直面する空間へのアクセスや空間内の行動の制限、そして空間内の女性の実践の特徴を記述し、分析した。まずは政府が認めている「宗教活動場所」であるモスクにおける回族女性たちの事例を挙げた。空間へのアクセスでも、空間の利用でも、男性と比べると、モスクの中の女性は周縁化されている。ところが、女性たちは決して、教義や制度がもたらす空間内のジェンダー構造の中に埋め込まれただけの存在ではないし、空間へのアクセスや空間内の自らの利益を確保するために、積極的にその可能性を探求している。モスク以外のインフォーマルな空間を積極的に利用することはその例である。第2節と第3節では、モスク以外の宗教勉強会への女性の参加について考察する。モスクによって周縁化された女性たちは、勉強会を通じて、宗教言説の領域に参入する道を切り開いた。また同時に、ネットワークを広げ、社会との接触を保つことも可能になった。

3つの空間に対する考察を通じて、女性の実践の共通な特徴を見出すことができた。つまり、教義に対しても制度に対しても、直接に抵抗することより、構造からもたらす抑圧を回避すること、そして、構造の中で動きかけながら、創造的に従うことである。女性のイスラームへの参入は、結局は女性たちは政府が認めている、男性中心のイスラームの宗教空間、宗教実践、そして宗教言説の周辺に取り込まれるだけであり、構造的限界があるという指摘もある。それに対して、ここでは、勉強会の参加者の事例から、宗教空間やイスラーム言説は女性たちにとって交渉の有効な資源となっており、彼女たちの日常の中で周囲の人びととの交渉を可能にする戦略的な実践を積極的に評価したい。他方、宗教空間への調査と分析を通じて、また、宗教言説領域、そしてコミュニティーのネットワークにおける回族女性の位置づけを明らかにし、その後の回族女性の間での宗教言説の創出と流通に関する内容の土台になった。

続く2つの章で、日常生活に視線を振り向け、義烏市における回族女性たちが日々の暮らしの中で、イスラームをどのように実践しているのかを記述し、分析した。第3章で市内における回族女性の全

体を対象にすることと対照的に、特定な集団に属する女性—市内に長く居住し、通訳として働く経験を持つ中間層と富裕層—を主な考察対象にした。

第4章では、回族女性の就業に関する2つの事例を通じて、現代中国都市部における回族女性たちがいかに多様なジェンダー秩序によって影響されているかを示すと同時に、自らの経験を介して、「ムスリム」として、「女性」としてのジェンダー役割を理解し、漢族中心の、そして男性中心の諸言説と交渉している状況を明らかにした。まず、第1節で女性の役割に関する中国主流社会のジェンダー秩序と回族コミュニティの中で流通しているイスラームのジェンダー秩序を概観し、その多様性と内部の混淆性を説明した。第2節で、市内におけるアラビア語通訳に従事する回族女性の経験と語りを取り上げた。女性たちが通訳を務めることに対し、コミュニティの公的な宗教言説は厳しく非難する。そのような状況の下で、中間層女性通訳はイスラームの宗教言説と主流社会の世俗的な言説を同時に利用することを通じて、女性のジェンダー役割に関する独特な語りを模索し、男性中心の公的な宗教イデオロギーと交渉している。次いで第3節では、近年、回族女性の中で起こっているネットビジネスの普及に注目する。それと共に、中間層女性通訳の語りは商行為を通じて、女性の中で広まって来ている。イスラームと非イスラームのジェンダー秩序が組み合わせられたそれらの語りは、非宗教的なルートを通じて流通し、回族女性が持つジェンダー秩序に影響を与えている。

取り上げた事例から明らかになったように、社会経済役割を一方的に強調する主流社会の男並みの男女平等でも、家庭内の役割を一方的に強調する市内のコミュニティにおけるモスクの宗教言説でも、女性たちは特定のジェンダーイデオロギーを全面的に否定的にも肯定的にも捉えない。宗教と世俗の境界を曖昧化するそのような語りは、複数のイデオロギーの間のささやかな隙間の中で、多様な言説に対する取捨、変容、そして混合によって形成されたものであり、独特なハイブリッドであると考えられる。

そして、第3章で取り上げた宗教空間における女性の実践もそうであったように、確かに女性たちの語りはモスクを中心にする公的な宗教言説を変革することはできない。あくまでも日常生活の中で、社会経済的役割と家庭内の役割の間のバランスを模索している時、自分の行動を一時的に正当化する

ための「臨時措置」にすぎない。しかし、隙間で展開されるそのような創発性とハイブリッド性は、市内における回族ムスリム女性のジェンダー役割に関する語りを特徴づけると同時に、彼女らが日常の中でジェンダー役割を語っていることを可能にしているのである。

第5章では世界的なイスラーム運動の1つの顕著な現象である女性のスカーフ問題に目を向ける。義烏市における回族女性のスカーフ着用実践を宗教外の利益に対する追求及び敬虔運動のどちらに一方的に還元するのではなく、具体的な社会状況の中で実践の意味を分析した。敬虔さを代表するイスラーム的な行為であると同時に女性の実践によって、非イスラーム的な要素も多数組み込まれていることが明らかになった。

第1節では、女性のスカーフの着用に関するクルアーンやハディースの中の章句を紹介し、教義の曖昧性と解釈の余地の存在を明らかにした。次いで、1980年代の改革開放以後における回族のスカーフの着用者の増加とスカーフのスタイルの多様化の実態を簡潔に述べた。第2節で、義烏市における回族女性の証言を取り上げた。二極化した社会状況の中で、女性たちの着用実践はどのような特徴があるのかを解明した。次いで第3節では、近年の市内におけるスカーフのファッション化に注目し、女性たちがなぜおしゃれなスカーフを着用するのか、ファッションと宗教はどのような関係であるのかを分析した。

市内のムスリム女性のスカーフの着用とスカーフのスタイルに関する実践から、共通した特徴が見られる。その1つは、家父長制の抑圧の象徴として扱われているスカーフの着用は、実際にはムスリム女性によって、積極的かつ能動的に実践されていることである。少なくとも、義烏市の場合、男性に従うというより、多くの女性は自発的にスカーフを着用し、スタイルを選択している。第2に、多くの女性にとってスカーフの意味と、スカーフの教義上の意味との間には重なっている部分もあれば、ずれている部分もある。スカーフの着用やファッション化は、全てを教義に還元することができないものである一方、それは教義とまったく無関係ということにもならない。つまり、それは個人の敬虔運動としてはもちろん、単なる利益を追求する手段のみと見なすこともできないのである。それらの実践は、女性自身がムスリムとして具体的な社会状況の下で、ムスリムとして生きる道を積極的に探

している証しであると考えられる。

本論文で展開した議論を通じて得られた知見は3点である。

1 つめは、回族社会の二極化と回族女性の二重の周縁化を明らかにしたことである。そのため、宗教と世俗、イスラームと非イスラームの分断を留意しつつ、概念の固定化を前提にしないアプローチから、構造と主体の対立を超えるエージェンシーの概念を導入し分析することが必要である。これは第3章の考察からも理解できる。そのようなアプローチから、二極化と二重の周縁化に直面する回族女性の実践を考察するとき、女性たちが構造の中で、構造を利用し、交渉するハイブリッドな言説、また、それと関連するアンビバレンスな行動に光を当てることができるようになった。

2 つめは回族女性のそれらの実践は流動性と複合性が備えていることである。そのような特徴は、重層構造の中で回族女性たちの主体の特徴を反映している。信仰を持つマイノリティ女性たちはエスニシティ、ジェンダー、宗教という複数の社会構造によってその存在が規定され、彼女らの主体はそれらの複数の社会構造と交渉するプロセスにある。その故、それは本質化された固定的な主体に還元しえない流動的なものになり、また「マイノリティ」、「女性」、あるいは「宗教信徒」といういずれの単一のアイデンティティに還元することができない複合的なものになる。本論の調査対象である個々のインフォーマントにとって、「回族」、「女性」、そして「ムスリム」としての経験は相互に絡み合っており、切り離すことができない。彼女らはいずれの固定的な単一のカテゴリーによって抑圧され、それを抵抗するだけではない。むしろ、自分をそれらのオーバーラップした経験の中心に位置づけることによって、固定的な単一のカテゴリーに属する言説や教えを相対化していく。流動的、複合的な経験を通じて、女性たちは具体的な状況の中の自分の位置づけを適切に認識する能力、そして、多様な既存の言説や教えを自分なりに再引用する能力を身につけることを可能にする。

3 つめはそれらの世俗的な信条体系とイスラームの信条体系を場面によって利用する能力が身についた女性たちの実践は、彼女らの個人的なネットワークだけではなく、さらに現在、インターネット上の商行為を通じて、義烏市、また全国他の地域の回族女性に影響を与え続けていることである。中間層や富裕層の女性から始めたファッションナブルなスカーフや微商というビジネスモデルが現在、市

内の専業主婦の中、さらに他の地域の回族女性の中で流行っていく。ファッションナブルなスカーフの着用や微商への参入を通じて、ビジネスプロモーションの中で利用するハイブリッドな言説から影響を受ける女性が増え続ける。生きにくさを直面し、どのように行動すれば、自己の女性として、回族として、ムスリムとしての生き方を追求しつつ、と同時に周りに「素晴らしい女性」、「敬虔なムスリム」であると認められるのかを摸索し始める。一見矛盾する諸言説の間に横断し、複数のイデオロギーを身につけながら、流動的、複合的な主体として自己を再定義するエージェンシーを発揮していく。こうしたエージェンシーこそが、非ムスリムやムスリム男性という他者を中心にする重層の構造の中で、よりよく生きるための新たな領域を作り出し、さらに将来、宗教そのものを家父長制のコントロールから解放し再解釈する可能性の一端を支えているのではないだろうか。